黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.94 (March 31, 2023)

第94号　2023年3月31日

例会発表要旨

10月例会　2022年10月15日　オンライン開催（Zoom）

① 両義的な窓―ボールドウィンの『ジョヴァンニの部屋』における身体

相木　裕史（津田塾大学）

ジェイムズ・ボールドウィンの『ジョヴァンニの部屋』をめぐるこれまでの研究では、社会的構築物としての人種やジェンダーがいかに撹乱されているかが論じられてきた。しかしながら、これらの研究においては、作品における身体表象の意義が十分に吟味されてこなかったように思われる。そこで本発表においては、とりわけアブジェクションと情動という観点から作品の身体表象を分析し、デイヴィッドが対峙するジレンマの核心に両義的な身体への意識が存在することを論証した。一方において、本作品における身体の両義性は、アブジェクションの文脈で前景化される。デイヴィッドの主体と身体の形成過程はアブジェクションの観点から説明されるものであり、アブジェクトとしての母と対峙するデイヴィッドは自らの身体を可塑的なものとして認識する。他方、そのような彼の身体観は、情動という観点からも説明されうる。間主体的ネットワークのうちに生起する情動によって、デイヴィッドの身体的境界が更新されていくさまを、本作品はさまざまに描き出す。そして本発表は、情動の作用に対するデイヴィッドの特徴的な態度を明らかにするために、窓という装置に内在する両義性に注目する。窓の透明性ではなくその両義性、つまり解放性と閉鎖性をあわせもつ媒体としての性質を強調する本作品は、自らの内部につねに外部が取り憑いていることを自覚するデイヴィッドの姿を浮き彫りにする。ジョヴァンニの部屋の意図的に曇らされた窓は、他者の眼差しが駆動する情動が彼の身体にもたらす作用を、デイヴィッドが拒みながらも受け入れることを可能にしているのだ。デイヴィッドが窓という装置に見出す両義性こそは、情動の作用に対する彼の態度を端的に示すものであり、それはアブジェクションの両義性という補助線を引くことでより明確になるのである。

② 「黒人女性史叙述の最前線―ベリー＆グロス著『アメリカ黒人女性史』翻訳書刊行によせて」

兼子歩（明治大学）、坂下史子（立命館大学）、土屋和代（東京大学）

本報告では、報告者 3 名による黒人女性史の翻訳書刊行に先立ち、最新の黒人女性史叙述を反映した本書の特色や内容を紹介した。

アメリカにおける奴隷制度確立前の時代から 21 世紀の現代に至る黒人女性の歴史を概観する本書は、移動、暴力、アクティヴィズムと抵抗、労働と起業家精神、犯罪化と投獄、芸術表現、セクシュアリティの 7 つのテーマを軸に、各時代の黒人女性の多様な経験を可能な限り彼女たちの声に基づき活写している。単に黒人女性「について」の歴史を叙述する以上に、黒人女性という「視点」を通してアメリカ史を再解釈するというアプローチをとっており、この点において日本で刊行された既存の多くの黒人女性史とは一線を画している。その顕著な例として、「female slaves（黒人女性奴隷）」など奴隷制下の人びとを示すために用いられてきた従来の表記を、主体となる女性に重点を置いた「enslaved women（奴隷化された黒人女性）」といった表記に統一している点が挙げられる。

また、いわゆる「大きな物語」の根本的な書き直しが試みられている点も本書の特色のひとつである。人種が奴隷制を通して制度化されていく上で黒人女性の存在が鍵となっていたこと、黒人女性の身体を搾取することで国家が成り立っていったことを示すとともに、黒人女性に対する否定的なイメージによって白人男性性や白人女性性という「アメリカ人」と同一視される市民像が構築されていったことが、本書を通じて明らかにされる。

このように、本書は黒人女性の経験を軸とした歴史書ではあるが、同時に人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、ナショナリティなど、現代アメリカの様々な位相を多面的に映し出す一冊でもあると言える。

1月例会　2023年1月21日　オンライン開催（Zoom）

① Blackness in ELT in Japan: A Raciolinguistic Perspective

Gregory Paul Glasgow（神田外語大学）

Informed by a conceptual frame that links transnationalism in English language teaching (ELT), a raciolinguistic perspective, and the political economy of ELT in Japan, I discussed findings from a study on educators employed nationwide in private English language schools, private dispatch companies, elite international schools, or recruited by the national Japan Exchange and Teaching (JET) Programme and local boards of education. Black Teachers of English (BTEs) in Japan hail not only from the US and the UK, but from Anglophone sub-Saharan African countries and the English-speaking Caribbean — contributing to the multiculturalism and diversity of the ELT community. Studies on the professional identities and experiences of BTEs in ELT are very rare, although interest has increased in response to the "social justice turn" in ELT / TESOL research, as well as what has broadly recognized as a global reckoning on matters of race and identity. In Japan, recent media interest in

bi/multicultural Japanese sports figures and the emergence of Black Lives Matter protests in major Japanese cities after the George Floyd murder in 2020 have been examples of how Japan is exploring — and reckoning — with its own views on race, multiculturalism, and diversity.

My research 1) highlights BTE motivations for coming to teach in Japan; 2) documents instances of racialization BTEs may have experienced in their workplaces and 3) explores pedagogical approaches used to introduce topics about racism/Blackness. I shared data from an ongoing study that included a discourse analysis of government websites, YouTube clips, and online recruitment sites for major language schools in Japan, and interviews with approximately 51 BTEs. My findings tentatively show that firstly, BTEs are motivated to come to Japan for reasons that range from economic need to the desire for adventure and self-actualization. Secondly, though most BTEs evaluated their ELT experiences in Japan positively, most of them navigated instances of racialization due to colorism, accentism, and/or nationality that ranged from casual or innocuous to more blatant or pernicious. Thirdly, textbook representations and curricular constraints in the state education system and private language school industry preclude BTEs from delving into matters of race/racism/Blackness more deeply. However, some BTEs, in collaboration with their Japanese counterparts, used the BLM protests as *ad hoc* teachable moments of racism/racialization. I concluded my talk by exploring professional development and educational policy implications.

② The Problem of Mobility in Colson Whitehead's *The Underground Railroad*

Wen-Tsing Chen（帝京大学）

The presentation focused on the depiction of mobility and stasis of enslaved African Americans in Colson Whitehead's *The Underground Railroad*, his 2016 speculative fiction about a teenage slave girl's harrowing journey running away from a Georgia plantation. While the work follows many of the traditions of slave narratives, it also challenges them by incorporating elements of fantasy, anachronism, and apocalypse. The most daring revision is a real underground railroad, through which the protagonist, Cora, escapes from station to station and experiences different facets of the horrors of slavery and racism. By using an actual "subterranean" railway as a narrative trope, Whitehead's novel highlights the significance of mobility in the characters' quest for subjectivity, literacy, and freedom. Mobility has always been an important part of the American national identity. With the rapid development of railroads in the mid- and late-nineteenth century, mobility became synonymous with progress, prosperity, and Americans' love of movement. On the other hand, the movement of slaves and free blacks was severely restricted by laws, racial codes, and the ideology of slavery society. Thus, the characters' escape, or more specifically, their illicit but "autonomous" mobility, "constitutes material and social violence" and has the potential to subvert the ideologies of slavery society. Furthermore, riding the underground railroad is also a process of "reading," attaining literacy and education for Cora, as she

learns about the truth of America's nation-building and mythmaking through her travels.

会員からの投稿

① Zora Neale Hurston を研究して

古谷　やす子

Zora Neale Hurston の作品を研究して、音声言語表現の大切さを知った。私は詩や短歌、文章を声に出して読むことが好きだったが、音声言語表現の持つ意味を深く考えたことはなかった。我々の社会が言葉を用いた表現で成り立っていることも深く考えずにいた。確かに我々は生きている間のみ言語表現できる。Hurston は言語表現にその人の生き方が表れていることに気づき、作品に著していった人である。彼女は心と心のつながり合いを、音声言語を主とする黒人だけの町、Eatonville の住民の生き方のなかに見つけた。Eatonville は彼女にとってユートピアだった。彼女はユートピアを夢見つつ存続できない理由を文化人類学の見地から探った。そして黒人だけの Eatonville と、黒人と白人が共存する社会における言語表現の違いを極めていった。彼女の作品は、我々の生活が音声言語表現に始まり他者の心に深い影響を及ぼすことを教えてくれた。私自身 80 年生きてきて自分が傷つきまた他者を傷つける言葉は、音声言語表現により起こることを納得した。もちろん心を震わす喜びも音声言語により引き起こされる。文字で読んだ言葉は何度も反復しない限り覚えられないが、声に出し直接言われた言葉は心に刺さり忘れられない。私だけでなく誰もが経験することではないだろうか。

Hurston は音声言語表現が主の人と、文字言語表現が主の人の人生への向き合い方が違うことを示そうとしたようである。彼女の最初の小説 *Jonah's Gourd Vine* (1934)の主人公 John と彼の妻 Lucy に対比が見られる。シェアクロッパーの家で育ち教育を受けていない John が、教育を受け言葉をよく知る自由黒人の Lucy に一目惚れして結婚する。彼の発する言葉は感情や欲望を直接表現するものだった。彼女の発する言葉は感情や欲望を抑えた理性的なものだった。両者の長所短所を描いた上で、彼女は音声言語表現の大切さを述べる。この作品には、文字言語表現だけの人はいないだろうが、文字言語表現を主とする生き方がいかに味気ないかと言わんばかりである。

Hurston は言語表現の違いについて、1934 年 "Characteristics of Negro Expression" に詳述している:「白人は書き言葉で考え、黒人は象形文字で考える」。Eatonville では音声言語表現が主で、音声言語表現は人間にもともと備わったものだと彼女は言う。たしかに赤児は、気分の良くなる状況を求めて大声を上げる。人間は本来心地よさを好み喜びを求めるものだと、アリストテレスも『詩論』で言及しているように、声として発せられる言語表現は、もともと喜びを求めるものだった。Hurston はまた、黒人は常にドラマを演じているとも言う。ドラマは言葉と肉体的な動きからなっている。我々は笑うとき、自然に口を開けて笑い声を発する。悲しいときは、涙を流して声を上げる。音声言語表現は言葉と身体の動きからなるドラマである。

ところが頭脳の発達に伴い頭の中で考え作り上げた抽象的観念的なものが自然に言語表現されるようになる。Hurston は白人社会では、言語表現が音声から始まることが忘れら

れ、音声言語表現が貶められていると言う。彼女は音声を使う表現と文字を使う表現の違いに気づいたうえで、音声言語表現をこよなく愛したようである。彼女の言語表現探求の道程は *Mules and Men*（1935） にまとめられている。この作品はフォークテイル集として評価されてきたが、実際はフォークテイルを使って音声言語表現を使う人と文字言語表現を使う人の生活の仕方の違いを述べる小説として書かれたものである。SNS の時代における言葉は、音声とも文字とも異なるのだろうか。いずれにしても、声として発せられる言葉の持つ意味を忘れてはいけないことを、Hurston が指摘したところが重要だと考える。

Hurston から音声言語表現の意味を教わり、私は自身を振り返った。そしてもしかして、たくさんの人を傷つけたのではないかと戦慄した。彼女はまた、言語表現がその人自身であり、その人の生き方の表れでもあると教えてくれた。彼女は、わたしたちの言語表現が音声言語表現と文字言語表現の両者から成り立っていることを教え、日常生活においても研究においても自分本位になりがちな私に、常に他者の気持ちになって考える方向を示してくれた。納得したとき、心が軽くなるのを覚えた。

② ケークウォークをめぐる考察：ドビュッシーとフローレンス・プライス

時里　祐子（関西大学・非）

下手の横好きで 10 年ほど通っているピアノ教室で、昨年、小学二年生の生徒が挑戦するコンクール課題曲に、Claude Debussy の『小さな黒人 *The little Nigar: Le Petit Nègre*』(1909) が選ばれたと聞いた 。『小さなくろんぼ』のタイトルのままの楽譜もまだ販売されている曲である。歴史背景や曲想など日本の小学校低学年に向けてどのように解説をされるのか、興味をかき立てられて、私も同じ曲の指導を受けてみたのだが、その機会に考察した事柄と、調べるうちに知ることとなった作曲家 Florence Price について記してみたい。

ご存じの方も多いと思うが、ドビュッシーはミンストレルの要素、特にケークウォークのリズムを取り入れた楽曲を 4 曲遺した。そのうち『ゴリウォーグのケークウォーク *Golliwogg's Cakewalk*』（1908）と『小さな黒人』は、アメリカやイギリスでは、人種差別的であるとして演奏を禁じる音楽学校もあり、タイトルになっているカリカチュアされた黒人の人形ゴリウォーグの販売や、それを真似たコスチュームの着用を禁じる州もあるという。また、アメリカやヨーロッパから投稿された演奏動画には、やはり人種差別的な曲であると指摘するコメントがつけられることも多い。対して日本では、おそらく、この曲が 19 世紀アメリカ南部で発展したケークウォークのダンスのリズム・パターンを持っていることもあまり知られてこなかったのではないだろうか。日本の小学生が演奏する動画などでは、ダンスというより徒競走の勢いで駆け抜けるように弾く演奏が多いように思う。また、ピアニスト青柳いづみこ氏の指摘などにより、最近ようやく修正されたが、ドビュッシーの 4 曲のうち、まさに『ミンストレル *Minstrels*』(1910)というタイトルの一曲は、長く（21 世紀にはいってもなお！）『吟遊詩人』と誤訳されていたほどに、その言葉の認知度は低い 。

無論、長いクラシック音楽の歴史において、他者が押し付けた人種イメージを主題に持つ曲は無数にあり、また排除しようとすれば歴史に蓋をすることになる。ただ、『小さな黒人』や『ゴリウォーグのケークウォーク』に関して言えば、タイトルや曲調だけでなく、おどけたケークウォークに、もったいぶった甘い寸劇のようなロマンティックな中間部を挟んだ構造もミンストレル・ショーを模倣しており、インターネットで検索すれば、ドビュッシーの愛娘シュシュのお気

に入りだったゴリウォーグ人形のイラストが印刷された初版譜の画像もすぐに出てくる。これを子どもが取り組む課題曲とすれば、その歴史背景を尋ねられたときには正確に説明する責任を引き受ける覚悟は必要だろう。

もちろん、ケークウォークとミンストレルの歴史は、非常に興味深く、理解しようとすれば様々な方向から感受性や思考を刺激するものであるのは確かだ。パロディの力強さをはらんでもいる。例えば、自身の恩師に改めて指導法を習ったという私の師匠は、冒頭「タラッタタッタ」のケークウォークの弾き方をまさに「正しく」、「黒人の小さな子どもがステッキをくるくる振り回しながら、大人のまねをして踊っているイメージで！」と説明した。このステッキのモチーフは何か。ケークウォークは綿花王国時代の南部の農園で賞品のケーキを競って踊ったことから名前が付けられたが、そのおどけた動きは奴隷達が「お上品な伝統」時代の白人奴隷主の気取った動作を真似たものだといわれる。ステッキのモチーフは、まさに黒人奴隷たちの白人に対する嘲笑を象徴したものだ。そう考えると『小さな黒人』も『ゴリウォーグのケークウォーク』も根底には奴隷制への抵抗をはらんでいる、というのは飛躍かもしれないが、顔を黒塗りにした白人が踊るケークウォークはそれ自体、皮肉な構造なのは確かだ。ただ、ドビュッシーが生きた 20 世紀初頭のパリでは、ミンストレルはもはや黒塗りの白人芸人ではなく黒人たちによって演じられており、ケークウォーク・ダンスは爆発的な人気を博していた。ドビュッシーの体感していたそれを正確にとらえようとするならば、ショービジネスは黒人が就くことのできる数少ない専門職であったことに加え、芸術やメディアにおけるネグロフィリアなど、複雑に成熟してしまった当時の人種差別のありようまでも理解しなくてはならないかもしれない。「さあ、この楽しい曲を弾いてみましょう」とはどうも言い難い背景だ。

しかしながら、冒頭のシンコペーションと小気味よい 2 拍子が組み合わされるケークウォークのリズムは確かに弾いても聴いても楽しい。そもそも弾き手を惹きつけるリズムとしてそこには、ケークウォークがあり、ミンストレルの商業的成功やフランスでの大流行を導いたのも、このリズムの持つ力なのだ。そこで、例えば小学生などを対象とする場合には、ドビュッシーのミンストレル調の曲の代わりに、もしくは並行して採用する曲として、2009 年に交響楽の遺稿が発見されて名を知られるようになった黒人女性作曲家、フローレンス・プライスが 1933 年に出版した『三つの黒人ダンス *Thee Negro Dances*』を紹介してみたい。

1887 年にアーカンソー州リトルロックに生まれたフローレンス・プライスは、シカゴ・ルネッサンス期においても数少なかった黒人女性作曲家の一人である。1920 年代後半からから 1953 年に亡くなるまでシカゴで活躍し、4 作の交響曲をはじめ、数々のオーケストラ及び鍵盤用の楽曲を書いたが、それらほとんどに、黒人霊歌やケークウォークのようなジューバ・ダンスの音階やリズムが取り入れられている。死後、ほぼ忘れられた存在となっていたが、2009 年に彼女が晩年に暮らした家とそこに眠っていた交響曲を含む未出版の楽譜が発見され、再演と再評価がなされるようになった。

初級学習者向けの『三つの黒人ダンス』は三つの小曲から成るが、特に 3 曲目「Ticklin‘ Toes」は人気が高い。この曲は、興味深いことに『小さな黒人』と全く同じ音のシンコペーションで始まる。プライス自身はドビュッシーを演奏した記述もあり、もちろん『小さな黒人』を知った上での音の採用であろうが、ドビュッシーの茶化すような陽気さとは違い、この曲はまさに赤ん坊の足をくすぐる母のような温かな母性を感じさせるダンス曲である。この曲を弾くと、プライスによる再解釈によって、ケークウォークは自民族の文化として取り戻されているように私には感じられる。もし、そうだとすれば、その理由は、彼女がこれを作曲した 1933 年までの時間的隔たりが、ケークウォークをミンストレルから解放したというような単純なこと

ではないだろう。

Rae Linda Brown によるフローレンス・プライスの伝記は、彼女自身の生涯に関する詳細な記述はもちろん、曽祖父母の代までさかのぼる系譜や、リトルロックの黒人達の経済格差に基づく分断の状況、プライスの楽譜を紹介しながらの詳細な音楽的特徴の分析などが、詳細に記された労作だ。 私にとって、特に興味深かったのは、19 世紀末からプライスが生きた時代のアメリカにおけるクラシック音楽、特に交響楽と黒人音楽の関係である。1893 年のシカゴ博覧会前後から本格的なシカゴ・ルネッサンスまでの時代、ケークウォークのような黒人音楽の要素こそが「アメリカ的」なものともてはやされ、アメリカの白人作曲家たちが盛んにそれらを取り入れた「国家的」交響曲を作り出そうとしていた。しかし、馬鹿馬鹿しく皮肉なことだが、黒人作曲家、演奏家たちはクラシック音楽界では完全にではないにしても、表舞台から排除されていたという。白人社会は西欧芸術の中心たる交響楽で黒人達の実力を認めることはできなかったのだ。このような時代から、プライスのような熱意ある黒人音楽家達は、シカゴに集い、連帯して黒人音楽家の協会を組織し、W.E.B Dubois など文学やその他の分野で活躍する黒人達と協力して、活動の場を広げていった。そのような中で、培ったクラシック音楽の堅固な知識と技術、そして自らの人種的ルーツへの明確な誇りと探究心によって、黒人霊歌やケークウォークを自らの音楽の中に取り入れていったのである。1933 年のシカゴ万国博覧会では、プライスの交響曲第 1 番がシカゴ交響楽団によって演奏された。

そのような大きな成功の中に響く民族的リズムとしてのケークウォークがあり、それを学ぶための練習曲として書かれたのが『三つの黒人のダンス』である。この練習曲の前書きでプライスはこう記している。「全ての黒人音楽の中で、リズムは最も重要です。･･･真に黒人的な活動の全ての局面で、仕事でも遊びでも、歌でも、演奏でも、リズムの質が決め手になるのです」。ぜひ日本でも多くのピアノ愛好家に、プライスのケークウォークを体感してほしいと思う。

退会者

Fanon Che WILKINS（ファノン・チェ・ウィルキンス）

編集後記

94号発行にあたり原稿を寄せてくださった会員の方々にお礼申し上げたい。「会報」の編集は毎号様々なことを考える良い機会をもらっている。本号は視覚資料がなく地味に映るが、非常に充実した内容になった。例会発表も文学、歴史、言語教育と幅広く刺激的であった。何よりも、例会では新しい試みとして研究発表以外に訳書紹介が行われた。新たなスタイルの例会がはじまり、これからがますます楽しみである。

「会員からの投稿」には大変興味深く刺激的なエッセイが2本寄せられた。一つは、ゾラ・ニール・ハーストンの音声言語について、もう一つはクラシック音楽とミンストレル音楽の関連についてである。19世紀アメリカの舞台芸能を研究する私としては、音声言語、音楽ともに「芸能」の要としてより深く探求しなければならない要素であり、大変考えさせられる内容であった。特に、ミンストレル・ショーのフランスでの流行やクラシック音楽への影響は、広く知られているが、まだまだ考察の余地がある。編集を行いながら心が躍った。今後も会員諸氏には、近況報告含め積極的な投稿をお願いしたい。

（猪熊　慶祐）

＜編集＞　黒人研究学会・編集部
〒839-8502　福岡県久留米市御井町 1635
久留米大学文学部・神本秀爾研究室気付

＜編集者＞　猪熊　慶祐
kei.inkm(a)fish-u.ac.jp
ホーム・ページアドレス
https://kmmtshuji.wixsite.com/jbsa